ノースウッド隠れ家

ストーリーモードのプロローグパート 2

パート 1 からの続き

翌朝、ミクは新品同様良い感じ目が覚めました。ミクは微笑んで伸ばし、ベッドで寝返り。彼女は隣にテーブルに畏敬の念を見ました。これは、おいしい料理のフルプレートで覆われていました。ミクはすでに垂涎ました。彼女はベッドから飛び起きとテーブルに座りました。すべてが信じられないほどおいしい見えました。奴隷のように彼女の新しい生活に余裕ができませんでした食品ミクのようなものでした。彼女は箸を拾い、彼女のマナーを維持するために努力し、食べ始めました。誰もが見ていましたか？彼女は知りませんでしたが、

彼女はまだ豚のように見えてほしくありませんでした。

ミクは見下ろし、彼女はすべてのことは、彼女の口に向かう途中にあった単一団子た食品の残された見たとき、顔を赤らめました。彼女は笑いました。少なくとも、彼女は食べ物を無駄にしませんでした。彼女は立ち上がって、提供される衣服のすべてが彼らにあまりいないと非常に露出度の高いだった、ドレッサーの引き出しの一つを取り出しました。ミクは顔を赤らめました。最後に、最後の引き出しの中に彼女はアクアマリンのランジェリードレスを見つけました。彼女はそれを置きます。それは彼女の上腹部と背中全体の材料は非常に透明であった、彼女の胸に試着のみだった、と彼女はあなたの上に曲げると、絶対にすべてを見ることができますが、少なくともそれは他の衣装のほとんどよりも優れていました。

ミクはゆっくりと彼女の大きな寝室のドアを開けて、不気味な廊下にダウン覗き。誰も周りなかったです。静かに、彼女は彼女のマスターを探して廊下をさまよいました。彼は、彼女が今まで会った中で最も威圧的な男だったと彼女は本当に彼を見てみたかったです。彼女はクレイジーだと思いました。彼女が戻ったばかりの彼女の部屋に行くと、彼は彼女に来るのを待つ必要があります。何奴隷女の子がやったことはありませんでしたか？エスケープはあっても、彼女の心を交差しませんでした。

彼女は大きな扉に達し、静かに内部ピアにそれを開きました。これは、不十分なキャンドルや松明に照らされ、暗くなっていました。彼女の目を調整する前に、それは彼女にしばらく時間

がかかりました。彼女は真ん中に大きなテーブルを持つ大規模なオープン余地があった、内部に歩きました。彼女は部屋のテーブルの隅に座っ姿に気づいたとき、彼女はちょうど約心臓発作を起こしました。「こんにちは、初音ミク、"美しい女性の声で迎えました。

曲線美の姿は彼女のかかとが地面をクリックすると、彼女に向かって歩いて「ごめんなさい！私は私が私の主人を探していた、私がノックしている必要があり、誰もがここにいた知らなかった、「ミクが熱いと感じました。謎の女性は笑いました。

彼女は光に足を踏み入れと笑ったとして「ハーロウはここにある、「声が発表しました。女性は彼女の腰に手を置かれ、点滅しました。彼女は美しい赤い髪と柔らかい青い目を持っていた、フレンドリーなように見えました。彼女は、明示、精巧な黒ビキニと黒脚と腕ストッキングを身に着けていました。彼女は先のとがった耳を包含側面の角を持っていました。「私はフィオーレ午前、それはあなたに会えてうれしいです。」

女性は彼女の背後にある小さな部屋に合図し、エレガントミクが通過できるように脇に辞任しました。ミクは小さな部屋の戸口に入ると、おなじみの支配的なシルエットは、彼女のビューを捕獲しました。

"だから、あなたが私を見つけた、"ハーロウが迎えました。彼は本当にセクシーに見えた、ミクが赤面しました。彼の髪は厄介でした。彼のコートは、彼がちょうど残っていた椅子をオフにぶら下がりました。彼は無い袖オープンシャツを着ていました。ミクは、彼は彼の腕が見えただけでどのように良い、他の日から彼の長いコートを着ていたときに前に気づいていませんでした。彼はゆっくりと彼女の周り丸で囲んだように、「あなたはかわいい "と彼は言いました。ミクは顔を赤らめました。

「私たちはあなたにいくつかの靴下を取得する必要があります、あなたは小さな女の子です、冷たい床があなたのために良いではありません」と彼は笑ったが、彼はまだ彼女の足の話をされたかどうミクは言うことができませんでした。

彼は彼女を拾い、彼女の隣のテーブルの上に彼女が座っていました。彼は彼女を敷設し、彼女の足がテーブルの上にあったと彼女の足は彼に広げたように、彼女の膝を曲げ、彼女のドレスを持ち上げます。彼は、彼女が下着を身に着けていなかった、smirked。彼は彼女の太ももをなめと小さなキスを築いた、ミクは息を呑んだとうめきました。

「私はあなたが、スレーブを私に伝えるために何かを持っていると思います "と、彼はキスの間に言いました。初音ミクは、彼女の心は全くブランクだった、彼女の肘の上に身を下支え。

「G-おはよう、マスター、「ミクが滑ってしまいました。

ハーロウは、テーブルに椅子に座って、彼女の足は彼の体のいずれかの側にあったので、彼に彼女を路肩に停車しました。彼は彼の手で彼女の太ももをこすりとミクは、彼女はテーブルの上に濡れを滴下し始めたかなり確信していました。ハーロウは、「今日は別の良いトレーニングの日になります。」、バック寄りかかったミクは顔を赤らめた。「あなたが最後の夜は非常によくやった、スレーブ、私は感銘を受け、「、ハーロウと前記ミクが微笑みました

彼女はハーローに近づくに寄りかかったように、「マスター、ありがとうございます、「ミクは静かに答えた、彼らの顔はわずかインチ離れました。ハーロウは腰の上に手を入れて、さらに近くので、彼女のお尻がテーブルの非常にエッジにあった彼女を引っ張りました。彼は彼女の首を下にキスをし、彼女の胸に彼女の体を彼の手を走りました。彼は親指と人差し指で彼女の乳首を軽く引っ張って、円でこすり、それらをマッサージ。ミクは喜びで静かにうめきました。彼はとても優しいと彼女に注意されていた、彼女はほとんど彼の恋人だけではなく、彼の奴隷のように感じました。

ミクが唇にハーロウにキスをする中で身を乗り出し、彼女は理由を知りませんでしたが、彼女は本当にしたかったのです。彼女はほぼに感じました。ハーロウは、彼女の頭の後ろをつかみ、ハード彼女の髪を引っ張ることによって、彼女を停止しました。ミク whimpered。「あなたの場所スレーブを忘れてはいけない、 "ハーロウは厳しく彼女を思い出しました。

ミクは少し悲しみを感じました。彼女は彼に好意を持っていましたか？彼女は、本当に恥ずかしかった、顔を赤らめ「私は私の上に来たのか分からない、私は申し訳ありませんマスターです。」

彼女は見下ろしたが、ハーロウは彼女の顎を押し上げ、彼は長い時間のために彼女の目に見つめていました。彼の視線はミクが重く呼吸と泣いている見つめていたほど強烈でした。ハーロウは、smirked ミクの頭の後ろをつかんで、大体彼女にキス。ミクは驚いて彼女の口を開け、ハーロウは、彼女の口の中に舌を押しました。彼は彼女に対する彼の舌をブラッシングし、ミクは彼の口の中にうめきました。彼の口はとても暖かく、柔らかく、濡れていました。ミクは、彼女は、彼らがキスをしたとして笑顔ハーロウを感じたまでは良かったことを確認していない、ハーロウの首の後ろを開催しました。彼はとても美味しかったです。ミクはそれを十分に得ることができませんでした。

ハーロウは、彼の腰の周りにミクの足と首に彼女の腕を引っ張りました。彼は彼女の上に彼と一緒にテーブルの上に彼女を敷設しました。彼は彼女の唇にキスをし、彼の舌で彼女の口を探求し続けました。ミクは、彼がキスを破ったとき、彼女はそれがとても好きだった息を呑みました。ハーロウは彼女の耳たぶに吸引し、ミクは彼女の背中をアーチと彼に対する彼女の胸を押し、whimpered。ハーロウはゆっくりとミクのオフに登りました。彼はミクが彼を残した彼のズボンの股に明確な粘着性の汚れに気づきました。彼は笑いました。

「私と一緒に来て、"彼は彼女の手を取って言いました。「はい、マスター、「ミクの上隣の部屋に彼を次のよう述べています。それは彼の寝室だった、それは本当にいい感じ。床は、彼女の足に寒かったです。彼女は部屋を見回しました。彼のベッドは巨大でした！ミクは背の高い人は本当に大きなベッドを必要とハーロウは約 6 フィートであったことを推測しているが。

「こっち、"ハーロウは小さい部屋にミクをリードすると述べました。それは彼女がお風呂を望んでいた、ミクは本当に興奮、洗面所ました。彼女はハーローに大きな笑みを与え、ハーロウは彼女の服を脱いで彼女に言いました。ミクは彼女がもはや彼女のマスターの前で裸になる約恥ずかしがり屋ではありませんでした、彼女のドレスから剥離し、彼の前に裸で立っていました。ハーロウは、彼のシャツを脱いだようミクは今、彼は唯一のズボンを着ていた、見ていました。ミクはハーロウは本当に素晴らしい体を持っていた、顔を赤らめ。彼はスキニーだったが、あなたはまだ明らかに彼の腹筋を見ることができました。ミクは手を差し伸べると彼の胃に触れることをひどくたかったが、彼女は衝動を抑制しました。ハーロウは、水と優雅な浴槽を充填開始しました。

ミクはハーロウの裸の体の動きを見ていました。彼女は何かが彼女の足をぽたぽた落ちる感じました。彼女がダウンして見て、顔を赤らめました。ハーロウは、彼女の足の広がりと彼女の猫ジュースが彼女の足を下に滴下で初音ミクを見に転じ。ハーロウは笑いました。「あなたが好きなものを参照してください？"

ミクは真っ赤に顔を赤らめました。ハーロウは彼の手で彼女の頭を開催しました。彼は一方でミクの手を取って、彼の胸に対して平らそれを押しました。

「これは、あなたが何を望むか、スレーブか？」彼は低い、セクシーな声で言いました。

ミクさんの手は震えていました。彼女は前に男の胸を感じたことがなかった、これはエキサイティングでした。彼女があまりにも彼の胸に彼女のもう一方の手を入れて、承認のために彼を

見上げました。「さあ、「彼は貪欲な目で彼女を見ていると述べました。彼女は彼の胸の下、彼の胃の上で彼女の手を滑らせ。彼の胸は暖かかったし、彼の皮膚が柔らかくなりました。彼女は彼女の背中の後ろに彼女の手で恥ずかしそうにバックステッピング前に、彼女の手アップと彼の体の下に数回以上を走りました。彼女は彼に微笑みました。「さて、あなたはどう思いますか？」彼は生意気鳴って言いました。

"私はそれが好き、マスター、「ミクは笑いました。

ハーロウは smirked と風呂の水を停止するように振り向きました。

「あなたは、マスターを私と一緒にお風呂に入っていますか？」ミクは尋ねました。 "いいえ、"ハーロウはイライラ鳴って答えました。 "ああ、"ミクは悲しそうに答えました。彼は風呂から水の入ったバケツを取り、石鹸のバーやキャビネットからの洗浄布を得ました。「これはあなたが方法によって、洗浄される場所である、 "ハーロウは、洗浄布を浸漬し、石鹸で泡立てと述べました。「あなたが見つけ、他の一つは私の乗組員のためのものである。そして、あなたは私なしでここに来ることを許されていません。」ハーロウはミクの胸に洗浄布を入れて、軽くこすり始めました。

「はい、マスター、「ミクは答えました。 "マスター？"彼は彼女の胸に降り、下洗浄として彼女は尋ねました。

「スレーブはい、 "ハーロウは答えました。

「私は本当に申し訳ありませんが、私は私の部屋に宿泊している必要があり、「ミクは眉をひそめました。

ハーロウは、「私はあなたの部屋に滞在することを望んでいた場合、私はあなたのドアをロックしているだろう。」、微笑んで彼の賞金を洗浄に焦点を当て

ミクは戻って微笑みました。ハーロウは、彼女の足の間に洗浄布を貼り付け、軽くこすりました。ミクは静かに息を呑みました。「あなたは私の洗浄布が汚れて取得している、 "ハーロウは smirked。

初音ミクは「申し訳ありません！」、赤面しました

「周りに回して、"ハーロウは、注文しました。ミクは周りのスピンしハーロウは彼女の背中に対して彼の胸を押しました。彼はバケツに洗濯布を落とし、ミクは泡で覆われていました。ハーロウは彼のキスのように彼女の滑らかな滑りやすいボディ上下に手を走ったし、彼女の首をビット。ミクはバック彼女の頭を投げハーローは、より簡単に彼女の首にキスできるよう側にそれを傾け、うめきました。ハーロウはまだ、なめる吸うと彼女の首にキスを、片手でミクの胸をマッサージし、他と彼女の猫をこすりました。「水が冷たいなる前のお風呂であなたを取得してみましょう、"ハーロウは彼女の耳にささやきました。

彼は彼女を拾い、ゆっくり浴槽に彼女を緩和、お風呂に彼女を運びました。水が熱すぎるが、素敵で暖かくはない、完璧でした。ミクは、彼らがびしょ濡れた、ハーロウパンツを見下ろしました。彼女は笑いました。ハーロウは自分を見下ろしました。彼は、彼のズボンの外にミクの満足度に多くを剥奪しました。今、彼は持っていたすべては彼の黒の下着でした。ミクは明らかにそこに大きく、硬いものを見ることができました。ハーロウは彼の勃起を見つめ、彼女をつかまえました。彼は床に彼のズボンを落とし、怒って彼女に歩いていきました。彼は彼の手で彼女の首を取って、彼女の頭の水中を押し込みました。

ミクは彼女の手で彼の腕を掴むと絞りました。彼女は、少なくとも深呼吸を取らすることができるように、彼は彼女にそれを与えた前に、彼女は罰を知ら思いたかったです。ミクはすでに彼の腕に彼女の爪を掘るとうごめくた水中で開催された 30 秒後。別の 30 秒とミクは成功せず、彼女の喉からハーローの手を取るために彼女のベストをしようとしていました。最後に、後の拷問ハーロウのほぼ 2 分手放します。ミクは、咳や窒息浮上しました。

彼女は彼女が行っていたかと思っハーロウを見上げました。「あなたは私を見てする権限を持っていなかった、"ハーロウはぶっきらぼうに言いました。

ミクは本当に罰は罪に合うとは思いませんでしたが、すぐに彼女は彼女が実際に彼の奴隷であったことを思い出しました。ハーロウは狂ったように彼女を快楽の後にひどく離れて彼女をプッシュしたかった理由を彼女は疑問に思いました。明らかに、マスターとスレーブの関係が複雑にされました。

「私は申し訳ありませんマスターよ、「ミクは自責の念と言いました。彼女は何も悪いことをしたとは思いませんでした。

「私はあなたのためのベッドの上にタオルを持って、お風呂から出て行け、"ハーロウは言いました。ミクは立ち上がっハーローは浴槽の外に彼女を助け、彼女はタオルに転倒ユビとしてスリップしない彼女のベストを試してみました。彼女は彼女の顔にそれを持ってきて、彼女の顔の乾燥をなで。彼女はタオルが臭いがどのようにきれいに愛さ。ハーロウは、彼が一種の怒っ見えた、彼女に歩いていきました。「ベッドの真ん中にあなたの胃を下に置きます。」ハーロウは、注文し、ミクは従いました。ハーロウは、彼がこのトレーニングのために明日まで待つつもりだった、彼のクローゼットに渡って歩いたが、彼女は、彼は喜んとして行うために彼をだったので、それは問題ではありませんでした。

ミクはハーロウは、それに接続されている 4 レザーボンデージストラップを持っていた 2 足の長い黒の金属棒で戻って来て見ていました。彼女はそれがために使用することができるものは知らなかったが、彼女は見つけるだろう、かなり確信していました。ハーロウは彼女の右足首と彼女の左足首にもう一方の端に棒の一端を取り付けられています。ミクは離れて彼女の足を引っ張ってみましたが、彼女はできませんでした。その後、ハーロウはミクの左手首を取り、彼女の左足首に紐で縛られ、彼女の右足首に彼女の右手首。

今ミクは全く動かすことができませんでした。彼女はかろうじてさえ身をよじることができます。金属棒は彼女の足は、すべてにハーロウのアクセスを与え、広い広げ続けました。ミクは、それは非常に迅速に疲れてしまった、苦労しないことを決めた、と彼女はすでに不快でした。ハーロウは、彼のドレッサーのうち、絹のネクタイを取って、ミクを目隠し。ミクはこれを好きではなかったです。彼らは彼女の上で使用された前に、彼女は彼のデバイスと奴隷とのハーロウを鑑賞できるようにしたかったです。

彼女はベッドの中で快適なスポットに彼女の頭を持って、彼女は豚のタイスプレッダーバーにリラックスするために彼女のベストを試みたが、何の救済を見つかりませんでした。彼女はちょうどまだ置いて、永遠のように思えた何のために待っていました。ハーロウは、ガラスバットプラグを保持クローゼットから出戻ってきました。彼は助けるが、彼の便利な仕事で笑顔ができませんでした。ミクはとてもかわいいと無力に見えました。

ハーロウはベッドに登り、彼の隣におもちゃを置きます。彼は彼の指を取り、ミクのぬれた猫内側に立ち往生。彼は素晴らしい、それを持って、その後、彼はおもちゃのための彼女の準備を彼女のお尻にそれをプッシュ潤滑。ミクは息を呑みました。ハーロウはミクのジュースにおもちゃをこすり、彼女はうめきました。彼はそれは素晴らしく、濡れ、彼女にそれをプッシュし、彼はおもちゃで指を置き換えます。ミクは大声でうめきました。ミクは彼女が彼女の中にあったとどのように彼女はこのことについて感じるべきかを知っていた望みました。

ハーロウは、彼がこの少女に感じたか、どのように彼女は彼についてどう感じたか近い好きではありませんでした。彼は彼の所有権を再確立する必要がありました。彼は道より、彼がすべき、この女の子が好きでした。彼女は意味奴隷というものを学ぶための唯一の方法は、規律を介していました。

ハーロウは、彼のドレッサーの引き出しの一つに乗って作物を発見し、ベッドの上で彼の無力スレーブに戻りました。彼は軽く彼女のお尻を横切り、彼女の猫まで、彼女の背筋が馬用のむちをドラッグ。彼女はシャッターのように彼は smirked。ミクは彼女が彼女が見ることができなかったので、について考えることができる最悪のもののために精神的に自分自身を準備しようとして whimpered。ハーロウは、マークを残して十分に懸命に刺すが、ないように十分に懸命に、ミクのお尻に対して鞭をはじい。ミクは衝撃から小さなあえぎを与えました。ハーロウは、彼女のお尻には、いくつかの異なる場所に難しく彼女をホイップし、ミクは痛みで毎回金切り声。彼は彼女の猫、に対してそれをタップ「痛いです！」ミクが叫びました。

「それはスレーブは、あなたのためにあまりにも多くのですか？」ハーロウは尋ねました。

「いいえ、「ミクは彼女が彼女のマスターは再び彼女に感銘を受けになりたかった、頑固に言いました。ハーロウはミクさんの勇気に微笑みました。ミクの底が刺さと痛みを感じた彼女は、特定のハーロウの訓練は始まったばかりしていたでした。ミクはため息をつくことを試みたが、それはより多くのすすり泣きのように聞こえることになりました。

ハーロウは彼の唇を舐め、彼女の猫は、彼女の体の自然な潤滑油を塗りのきらめくクリアコートで覆われていました。ハーロウは彼女のぬれたジュースの良い量を引く、彼女の猫まで鞭を走りました。彼は彼の唇に鞭を持ってきて、彼女の甘いジュースをオフに舐めました。ハーロウから来た深い貪欲なうめき声がほぼミクのオーガズムを作りました。彼女のための彼の希望は、彼女が drooled とてもおいしい聞こえました。

ハーロウは、脳卒中ミクの髪にベッドの周りを歩きました。「あなたは奴隷を何をしたいですか？」彼は彼女に尋ねました。

「あなたを喜ばせるために、マスターは、「彼女はすぐに答えました。

彼は正確にこんなに早く、この応答に計画していなかったが、彼は柔軟でした。彼女の頭がベッドを離れてハングするまで、彼は肩によって前方に彼女の体を引っ張りました。「なぜあなたは私を喜ばせたいですか？」ハーロウは尋ねました。

「あなたが私のマスターだとあなたを幸せにしたいので、「彼女は笑って言いました。

「あなたの口を開き、「彼は命じ、彼女はいました。

ハーロウは彼の下着を引き下げ、彼女の舌に対して彼のペニスの頭をこすりました。ハーロウは簡単に彼女を窒息せずに自分のペニスの第三に彼女の口を満たしました。ミクは、彼が彼女の中にあった、赤面しました。彼女は彼がだろうと思っていないようでは、それはまだ本当に良いと感じました。彼は彼女を信頼できるようにそれは感じました。

「私の奴隷をしてください、"ハーロウは要求しました。ミクはなめと吸い込まれ、円の周り彼女の舌を旋回します。彼女は彼女の口にそれの多くを押して、上下に吸い込ま。それが終了した場所彼女は疑問に思いました。これは、厚さであったとミクは小さな口を持っていました。彼女は顎が傷つけ感じることができたし、彼女は彼女の口はすべての道を開くストレッチしなければならなかったが、彼女は気にしませんでした。ハーロウはミクの頭の後ろをつかんで、彼女の内側に自分自身のより多くを押しました。彼女は猿轡と咳ハーローは微笑みました。「あなたは私のすべてを取ることができないのですか？」ハーロウは彼女をからかいました。ミク whimpered。ハーロウは、それはほとんどすべての方法でプッシュして、ミク猿轡。いくつかは、彼女の顔面紅潮を下に脱出し、ものの目隠しは、彼女の涙を浴び始めました。

ハーロウは、彼女の口の中と外に彼のペニスを突き、彼女は whimpered、まだ彼の長さに窒息します。ハーロウは、彼女の髪をなで、「それは良い女の子だ」と彼はうめきました。彼はその後、彼は思った、と彼はすでに、彼はそれを愛するだろうと思っていたこのロット以上を楽しみました。彼女の口はとても暖かく湿った、彼は唯一の彼女のタイトな猫のように感じるだろうか想像できます。彼はしっかりと両手で彼女の頭を掴ん、彼は兼ことを約あった感じることができました。「初音ミクは、「ハーロウはうめき、「私が兼するつもりです。」彼は、彼女に警告するために彼の素敵だと思いました。

ミクは、彼が彼女の名前によって彼女を呼んでいた、赤面しました。彼は、スレーブを言いませんでした。彼女は彼の上に、さらに彼女の口を強制的に吸引して、彼女の口は甘い液体で満たされるまで、気持ちが愛し、困難なめます。彼女はになっていた場合、彼女は知りませんでしたが、彼女はそれが行くように、それは速く彼女の口を充填したためにどこにもありましたので、それを飲み込みました。彼は良い味がした、と彼女は思いました。彼はハーロウないミクのような味、彼女は異なる味がしました。彼女は誰もが代わりに同じの異なる味を持っていた考え出しました。ハーロウは、彼女の口から引き出され、彼は彼の精液を飲み込むために彼女を注文するつもりだったが、彼女はすでに持っていました。彼女は最後の夜だったと同じく

らい疲れを感じ、空気のために息を呑みました。ハーロウは、バスルームに歩いて、彼のペニスを乾燥させ、その後、彼は彼のクローゼットの中に歩いて、下着の新鮮なペアに引っ張りました。

彼はミクに戻り、彼女の手足を解放し、彼女の束縛の革のストラップを解きました。彼女は、彼らがとても痛みだった、ゆっくりと彼女の腕と脚を伸ばし。彼女も彼女のお尻に触れたくありませんでした。ハーロウは、彼のベッドの上に登り、彼の上にミクを引っ張りました。彼女は顔を赤らめ、彼女の裸の体は彼と接触して来たようにうめきました。彼のハード、暖かい胸は彼女に対してとても歓迎感じました。彼女は彼の周りに彼女の足を包み、彼の肩に頭を休ませました。彼女がアップし、彼の腹筋ダウン彼女の手を走ったし、彼は彼女のために彼の胃を曲げられたときに息を呑みました。彼女は彼を見上げて、彼は彼女に生意気な笑顔を与えました。彼は生意気なことにあらゆる理由があった、と彼女は思いました。彼女は前のような格好良い男を見たことがなかったです。

ミクはハーローの肩に眠ってしまいました。彼は、これが起こることを意図していませんでした。彼は彼女を離れてプッシュする懸命に試みました。なぜ彼ができなかった彼は理解していませんでした。

ミクはまだ痛みを感じて目が覚めました。それは奇妙なことだ、と彼女は思いました。彼女は右のハーロウの腕の上に、周りに巻か。彼女は息を呑んだと顔を赤らめました。彼女は彼が最後の夜彼と彼女の睡眠を聞かせて忘れてしまいました。彼女は彼の腕をロールオフし、彼女の膝の上に乗って、彼にクローズアップクロール。彼女は彼の胸の上昇と落下を見ました。彼女は彼にキスをしたかったが、彼女は彼を覚ますために 1 になることを望んでいませんでした。彼女は彼にキスをする前に許可を求めることになっていましたか？彼女は自分の限界を楽しんでいない、ため息をつきました。彼女は彼のガールフレンドはなかったが、彼女は彼の奴隷でした。彼は、彼女が昨日会った多分女の子がガールフレンドを持っていた場合、彼女は疑問に思いました。彼がした場合、彼女は彼に尋ねたことがありませんでした。それとも、彼が最終的にミクの疲れや新しいスレーブを発見した場合。彼女は彼女の唇をビット、ベッドから飛び出しました。彼女はもうそれについて考えたくありませんでした。

初音ミクは、ミラーを探して、バスルームに入りました。彼女は淡いピンクの色から、ミラーに離れていない単一のマークを彼女のお尻を向けたが、彼女はまだ痛いでした。彼女は近い見て、彼女の内側に何かがありました！これは、お尻のプラグでした。彼女はゆっくりとそれを引き出します。痛いです！彼女は一体、この事がためだったが、ハーロウは彼女の最後の夜の内部にそれを入れていたときに思い出したかと思いました。彼女はまあ、それを取ることになっていなかった場合、彼女は疑問に思いました。彼女は彼のドレッサーの上に置きました。

彼女の目は彼女の背後に影の姿をキャッチされ、彼女は息を呑んだと戸口に立っハーロウに周りに回転させました。「G-おはよう...マスター "と彼女はつぶやきました。

ハーロウは笑って、彼女の両側の壁に彼の腕の惑星との壁に彼女を追い詰め。彼はミクの目を見て、情熱的に彼女にキスをしました。ミクはすぐに彼のために彼女の欲望が彼女を追い越してみましょう、彼らはおおよそキスをしながら、彼女は彼にしがみつい。ハーロウは、強度に彼の腰の周りに彼女の足を引っ張りました。「私にホールド、「彼は静かに言いました。彼らが戻って寝室に歩き始めたミクはハーロウの首に腕を包みました。

「どこにマスターを行くの？」ミクは尋ねました。

ハーロウは、「私は私たちの最初の時間は私のベッドになりたい。」、彼女に微笑みました